

ラホヤ村通信

(4)

高垣愉佳

1. インターナショナル・センター

前回、インターナショナル・センターの交流カフェでの出来事についての話をしたので、今回も引き続き、インターナショナル・センターの話しから始めたいと思う。

インターナショナル・センターでは様々な活動が行われている。日本の大学では見られない活動としては、常設のリサイクルショップがある事、クリスマスや感謝祭にアメリカ人の家庭で一泊共に過ごすようなイベントがあることなどが挙げられる。またインターナショナル・センターで活動するボランティアの人達が学生だけではなく、学生の保護者、卒業生を含む地域の人々であることも特徴と言えるだろう。次の学期からは新たに、一流の教授達とお茶をしながら気軽に話をする、『プロフェッサー・カフェ』という取り組みが始まるらしい。

最近になって気づいたのだが、“インターナショナル・センター”というネーミング自体が、この部署の在り方を端的に表しているように思う。日本の大学によくあるのは、インターナショナル・エクスチェンジ・センター（国際交流センター）だが、似ているようでいて違う。

もちろんインターナショナル・センターの活動の多くも国際交流に関するものだが、国際交流をすることが目的になっているわ

けではなく、国際交流を行った結果、学問や社会が発展することを真の目的としているのではないかと思った。

インターナショナル・センターの取り組みには、留学生以外にも様々な人達が参加する。留学生以外の人たちが思わず参加してしまう仕組みが、あちこちに散りばめられている。

例えば、常設のリサイクルショップでは、大学内の留学生、学生、教職員から寄付された物を売るだけではなく、地域の人からの寄付を受け入れ、更に地域のリサイクルショップ業者の売れ残りを無料で引き取って販売している。そんなわけで、インターナショナル・センターのリサイクルショップは物が豊富で、且つ本当に安い。そのことを知っている人たちは、学外から買い物をする為に大学にやってくる。リサイクルショップの店番も学内外のボランティアが行っている。レジのカウンター越しに日々交流が行われている。

また、毎週 5 ドルで外国文化の紹介を見ながら外国料理が食べられる、インターナショナル・ランチはこの辺りでは有名な催しものになっているようで、インターナショナル・センターの前に毎週長蛇の列が出来る。留学生や学生、教職員、地域の人だけでなく、ホームレスの人達もちらほら参

加している。

というのも、サラダ、メイン、デザート、ドリンク付きで 5 ドルというのは、アメリカでは破格の値段だからだ。あれだけの物をお腹いっぱい食べようと思うと、2 倍から 3 倍の値段になる。

そもそも、アメリカの大学には、日本の大学のように安価で比較的バランスの良い食事が出る“学生食堂”というものは存在しない。日本のショッピングモールのイートインコーナーのような所に、ピザ屋さんやサブウェイ、パンダ・エクスプレス、タコス屋さんなど、日本人から見るとジャンクフードのようなお店がたくさん入っている。そして、それらとて、決して安くは無い。

そんなわけで、このイベントには国際交流に興味は無さそうな人達も、食べ物につられて多数参加している。それはそれで、普段出会う機会の無い人達の出会いの場となっているようで、興味深く思った。

普段食事の支度をしている主婦の視点からすると、5 ドルでは食材すら賄えないのではないかと心配していたが、そんな心配は無用であった。地域のロータリークラブが、この催し物の資金援助をしているということだった。

ロータリークラブと聞くと、日本でも観光地などに植樹したとか、記念碑を建てたとかで掲示してあるのを見かけたことがあるのを思い出した。記念碑を見てもロータリークラブに入ろうという気にはならないように思うが、このような活動を見たり体験した人達の中には、将来ロータリークラブに入会する人が出てくるかもしれないなと思った。大学にとっても、学生にとって

も、地域にとっても益のある、win・win・win のいいアイデアだと思った。



ワールドランチの様子。この日はインドがテーマ。

2. ホームレス

インターナショナル・センターの催し物にもホームレスの人が参加するように、サンディエゴにはホームレスの人達がたくさん居る。アメリカ人に聞いた話では、サンディエゴは気候が良くて、治安が良いので、ホームレスに人気の街なのだそうだ。特に、冬場になると寒い地域からバスや電車を乗り継いで、サンディエゴにやってくるホームレスの人達がたくさん居るのだと聞いた。まるで渡り鳥のようだなと思った。

ダウンタウンには一ブロック毎に一人くらいのホームレスの人を見かける。私が普段うろろしているラホヤ市内でも、スーパーマーケットの近くの交差点などで、いつも決まったホームレスの人達を何人も見かける。

彼らはなかなか活動的で、交差点の各コーナーや、中央分離帯に段ボールで作った

プラカードを持って立っていることが多い。プラカードに書かれている内容は人によって様々だ。『スマイル』『変化か死か』など、恐らくその人それぞれの人生哲学と思われるようなことを書いている人もあれば、『コンピューターの会社に勤めていましたが、先月首になりました。子供が 3 人居て、生活が出来ません。私に助けをください。』というような具体的な事を長めの文章で書いている人も居る。

そういうホームレスの人達のアクションに対して、アメリカ人の人達がどのように対応しているのかを観察したところ、15 分に一回くらいの割合で、お金を恵んであげる人が居るようだった。ほとんどが、信号待ちで止まった時に、窓を開けて 1~10 ドルくらいを渡すパターンだった。ホームレスの近くで信号停止にならなかった人の中には、わざわざクラクションを鳴らして、ホームレスの人を自分の近くに呼んで、お金を渡す人も居た。

大抵の場合、お金を受け取ったホームレスの人は、お金をくれた人に何かお礼を言う。「ありがとう。」だけのこともあれば、「あなたにも神の恵みがありますように。」というような祝福の言葉を贈る人も居る。また、「あなたの行動は、この世界の変化が始まる第一歩となるだろう。」というような、とても意味深そうな言葉を贈るホームレスの人も居た。

このようにして、人が人にお金を渡すことに関しては、賛否両論あるだろうとは思ふ。もらったお金をドラッグに使ってしまう人が居るかもしれないし、一方でそのお金で生きながらえている人も居るだろうと思う。なので、簡単にいい悪いと言うこと

は出来ないと思う。

いいか悪いかは別として、ホームレスの人達が、思いのほか晴れやかで楽しそうな顔でアクションしているのを見る度に、私は少し嬉しくなるのだった。日本でよく見かけるホームレスのように、段ボールの中で包まっているタイプのホームレスはほとんど見かけなかった。サンディエゴのホームレスの瞳に宿る晴れやかさは、今自分に出来ることを考えて精一杯実行している、という所から来る晴れやかさなのだろうか？本当の所は彼ら自身にしか分からない。



笑顔 (SMILE) のプラカードを掲げていつも立っているホームレスのおじさん。